

令和6年11月7日(木)

小山田信茂公顕彰会 第11回講演会

演題：小山田信茂公と岩殿城

島崎

諸項

日時：令和6年10月19日(土) 13:30~15:40

場所：大月商店街協同組合 2F ホール

講演者：上野原市郷土研究会 会長 長谷川 孟 様

配布資料：第11回講演会「小山田信茂公と岩殿城」

- 1, 進行 武田
- 2, 開会のことば 溝口様
- 3, 会長挨拶 小俣様
- 4, 講師紹介 折笠様

長谷川孟先生は昭和11年に上野原市で生まれ、都留高等学校を経て国学院大学文学部史学科考古学専攻で学びました。その後、神奈川県
の教育界で活躍し、小学校の校長を務められました。

退職後は、郡内および上野原市の歴史を研究し、現在は上野原市郷土研究会の会長として、調査結果を講演で発表するなど精力的に活動され、
地域振興に尽力され高く評価されております。

本日は「小山田信茂公と岩殿城」についてのお話を伺います。それでは、長谷川先生、どうぞよろしくお願いいたします。

- 5, 講演 ※は講演内の話

	講演	感想
1	【自己紹介】 初めての所帯は大月でした。	

【小山田氏の紹介】

第 17 代小山田信茂公は、田野で勝頼が自尽したので、その煽りを受けて善光寺あたりで罰を受けている。小山田氏の最後の当主となっている。

平安時代の末頃に関東八平治の一つ秩父党の分かれて、武蔵野小山田の庄から出たということで小山田という名字を名乗った。

※ 知人のお惣菜作りをしている人が小山田（現原町田⇒町田）の 1 回／月の市に売りに行かれています。意外と身近に感じます。

小山田氏が郡内に来たきっかけはいろいろ有るが有力な説は下記二つ

- ① 郡内小山田氏の祖と言われる六郎行幸が、祖母（横山党の四代野新大夫の娘）の持参した、郡内田原の荘の別当となって郡内に入って来た。
- ② 古郡氏が開いた波加利庄の庄官補助役として、郡内に来た。

※ 横山党から出た古郡氏が上野原にいた。本来牧場経営で優馬を養い都へ貢ぎ物として送るとというのが本来の仕事。

※ ところが郡内に入った小山田氏は郡内に水田がまことに無い（少ない）ので、現在もそうですけど。食料の確保のため水田開発を、ご当地の笹子川流域を開墾して水田を築いた。私は今でも甲府へ行くとき列車の窓から初狩を過ぎた頃から覗くと、下の方の田んぼにその頃に造ったかなと思われる大きな石を土手に組み込んだしっかりした土手の水田が見れる。この辺りを古郡氏が開墾したのかなと甲府へ行くたびに思う。この荘園の管理の補助役として小山田氏を招いた。

皆さんは①の説と思われるが、私はへそが曲がっているので②の説と思っています。

※ 何故かというと、小山田氏の古い足跡を見ていると初狩との関係が感じられる。これは第六感みたいなものですが、偶然とは言え最後の信茂公の首塚と慰霊碑が初狩にあるっていうのも因縁めいたものを感じる。祖先の引き合わせではないかと思う。

いずれの説でも八王子の横山党との関係で郡内に入ったということだけは間違いでは無いと思っています。

※ 八王子の横山党は鎌倉時代の初期には非常に勢力があった。和田義盛と縁戚関係を持つ

丸島和洋氏の本で、恩賞で頂いた土地が郡内にあり何男かが入り、本家の小山田荘の小山田は北条得宗家の有力御家人つぶしにあったと記憶しています。

ていたので非常に鎌倉御家人の中では力があつた。古郡氏もそれにあやかつて三代目が活躍している。これは伝説的な話ですが段葛を古郡氏が下つてきたら、下から甲斐の武田太郎が上つてきたと、鉢合わせしたところで古郡氏がこの田舎侍よ俺たちが通るのだから退きなさいと、大げさに言うと蹴落としたとこのような伝説めいたことが鎌倉草紙に残っているというんですけど、私はしっかり調べた事はありません。たしかに鎌倉御家人だったら、武蔵から出てきた古郷氏の方が甲斐よりも中心地に近いということで田舎者だと言ってもおかしくない。そのくらい古郡氏の力は振るつた。

※ 私は上野原で手前味噌ですけど、なぜ古郡祭りを復活させないのか。これだけのプライドを市民が持てるんじゃないか余計なことを言うんだけど、どうも市長は目の前の事に夢中で歴史を学ぶほどのゆとりがなさそうです。今の村上さんはちょっと違う。私の学生時代からの付き合いで、先ほど紹介のあつた歴史でも私は土方の方で穴穿り何ですよ。発掘関係で彼と接触して長い付き合いですから、賞賛？いやって言うほど知っている仲です。ほんとに思うとおりにはいかないもので、そこへいくと大月市のほうがですね、皆さん方のようにですね、いろいろな面で市を盛り立てようという気持ちが大事で、これこそ市民中心の政治であると。岩殿の鬼ヶ島伝説とか箕田先生が頑張っていますけど歴史的に見て厳しいですけど、まんざら無かつたことでは無い。私達が鼻つたらしの頃から鬼の石棒が突き刺さっていたり、ですからまるっきり根拠が無いわけでは無いです。やはり市民に自分たちの市にプライドが持てるような形は、私は良いと思うんです。大賛成です。私は 20 年間上野原中学 1 年生の野外学習にかり出されているんですけど、そこでいつも上野原の歴史に触れてプライドを持ちなさいと言うんですけど、なかなか難しいです。

NHK の「鎌倉殿の 13 人」では初期は源氏ということで平家を討つときは頼朝と同等のような時もあったようなので時期による。どちらにしても鎌倉の御家人排除があり、両家影響を受けた。

	講演	感想
3	<p>【岩殿山城】</p> <p>小山田氏と郡内の関係をお話してきましたが、後ですぬ頂いた資料に岩殿山を小山田の城郭というので、先ほど音楽が流れていてお聞きして、小山田の長い 17 代にわたる 450 年の歴史を紐解いてみました。これが間違いで無いという証拠になる資料を、配布資料に書いておいたんです。広教寺の御本尊の台座に書いてあった。</p>	
2	<p>【小山田氏の紹介】混乱して資料の小山田氏の話に戻る。</p> <p>鎌倉時代に古郡氏は初狩の競石郷二木の処で自尽して果てる。この時に小山田氏は、私は南側の山地に潜んで難を逃れたと思う。</p> <p>※ 仕事は手引きしてもらったが切腹に付き合うほどの仲ではない。一族を守るため宝と初狩の山の中に潜んで難を逃れ、結局初狩の方は所領として武田家の一族が加わっている。郡内は確か八王子を貰った名前が出てこない。公家から出た御家人の一族が八王子を中心にして上野原を支配している。なので、古郡氏は上野原には戻れなかった。それで自分が開いた初狩で自刃した。</p> <p>※ 笹子川は今国道 20 号の北側を通っているが、競石の頃っていうのは笹子川が国道の南側を通っていて、今の国道の町に競石があり、南側の山が崩れて今の地形になっている。こんなふうな話を聞いている。</p> <p>いづれにしても山の中に隠れていた小山田氏は、頃合いを見て宝の方に下りていった。話が前後しましたが都留の大幡の広教寺の辺にたどり着くわけですね。その辺を地盤にして落ち着いて、様子を見て鎌倉との繋がりを取っていく。</p> <p>※ 幕府の執権の北条氏と小山田氏は繋がりが出来ているようです。鎌倉時代の頼朝の源氏は皆さんご存知の通り 3 代で終わり、それ以後は伊豆から出た北条氏の執権の時代ですから、そういう関係から領地を徐々に広げていったんじゃないかと思う。桂方面に最終的に谷村を中心にしていくわけですけど、勝山城を築くことになっていくわけです。</p> <p>明德元年の六月十六日にご本尊の地蔵菩薩坐像の台版があり年は 23 歳だったとある。こういうことから、ご本尊は小山田氏 10 代小山田小四郎信美の幼少時代と一致すると、広教寺と</p>	

	<p>の関係が出てくる。</p> <p>初代の六郎行幸の戒名が「幸行寺殿羈山全公」このような法号を持っている。つまり名前をひっくり返している。広教と一致するんですね。どうも初代から6代までの墓所が不明であるというのが小山田の歴史の様ですが、どうも初代の行幸は広教寺と一致するのでは無いか</p> <p>※ 私も上野原の郷土史研究会のメンバーと 20 年前にマイクロバスで初狩からずうっと回ったんです。広教寺に寄って住職さんに話を聞いたり上げてもらったりしたんです。山梨の勸学院というところへ住職も行っていて、そんな関係で住職も非常に親切にしてくれて中をよく見せてくれた。見ているとただ寺院ではなく鎌倉時代の郭構え、そういうものをお寺に感じたんです。皆さんどうですかね、お寺っていう感じではなく、けっこう広々としていますから、かなりの力で集中できるような城っていうよりも郭（閣？）造りという格だけの感じを受けて帰ってきた。それから南に下って勝山城を見て帰ったんですけど、その時に写した資料が今回非常に役立った。大勢の方が研究されていますから</p>	
--	---	--

	講演	感想
3	<p>【岩殿山城】 前後します。</p> <p>岩殿が小山田氏の出城だったというのは長い歴史の中ではあるような気がする。</p> <p>十二代小山田弥三郎信光のお父さんが弥太郎信実の号が儀山、又は山城守それから谷村城主その次に初代岩殿城主となっています。これをみると小山田と岩殿城は無縁では無い。ようするに小山田氏が確かに城主としてこの時代入っていたという証が残っている訳です。</p>	
4	<p>【武田氏と小山田氏】</p> <p>この時の武田の当主は武田信昌という人です。信虎のお爺さんにあたる人です。宝徳年中（1449年～1452年）この頃は間違いなく小山田氏が岩殿城主であった。</p> <p>※ この人の爺さんの武田信重は、同族の穴山氏のために討死している。武田氏も長い歴史の中で同族相争うこういう時があったんです。信昌のお母さんが小山田の出たと思いました。その関係があるから国中から逃げてきて郡内の小山田のところに匿われていたわ</p>	

	<p>けです。つまり中津森に来ていたという話が残っていた。</p> <p>※ 後に小山田氏のバックアップで国中に戻り、勢力を取り戻し反対する者をやっつけて、名実ともに武田の当主になったという時代です。こういう時代ですから小山田氏も国中でも力を持っていたという時代があった。</p> <p>武田氏と小山田氏の歴史は、ほとんど450年の歴史は同じなんです。</p> <p>両氏ともに滅んだのが天正10年ですから、勝頼が野田で自刃しているし、善光寺で切られて死んでいます。両方ともに終わりは同じ、武田氏が甲斐に入ったのが大治5年1130年。小山田氏より10年早いですが、ところが、この時武田氏は、常陸から追い出されたときです。ですから、実際に武田が甲斐に入ってきたのは、これから小十年後では無いか。こういうふうに私は観ている。</p> <p>【未説明】小山田氏と武田氏は南北朝時代から姻戚関係にあり、共に関係を深めている。</p>	
--	--	--

	講演	感想
5	<p>【武田氏の甲斐入りルート】</p> <p>※ もう一つは今の茨城の常陸からどうやって甲斐に入ったか。このコースですけど、表街道は八王子の横山党が牛耳っていますから、うっかりそっちに出ていきますと、横山党に全滅させられるおそれがある。ですから、横山党の勢力をうまくかわして甲斐を狙うとすると、丹波の方に行くしかなかったと思う。</p> <p>※ そうするといきなり一族がぞろぞろ甲斐に入った場合、豪族が居たわけですから、豪族に滅ぼされるおそれもあるわけです。罪を負って流罪になっている訳ですから西原あたりに潜んだんじゃないかと思う。西原の一宮に隠れたんじゃないかと思う。</p> <p>※ そして先発隊が大菩薩を越えて甲斐に入り様子を伺って 日川谷のあたりが大丈夫だと確認してから私は行ったと解釈している。</p>	<p>2022年の信玄公祭りの甲州寺子屋第二部では武田一族は親戚(源氏)を頼って、上野国(群馬県)の新田家と信濃の(長野県)の平賀家と連携して信濃国佐久郡を経て甲斐国に入国とある。その後一族は武田(韮崎・甲府・笛吹)、加賀美(南アルプス・身延・南部)、安田(山梨・甲州)の三つに分かれ、鎌倉時代頼朝や北条得宗家の有力御家人つぶしなどでいろいろあったようです。</p> <p>それで武田家氏神の武田八幡宮が韮崎にあると思われる。</p>
6	<p>【武田氏丹波ルート甲斐入り、西原に居た証拠】</p> <p>※ これは私の推測じゃないんです。幻の棟札が三枚ある。これは写真だけ残って本物は腐らしてしまった。これが聞くと涙の物語。家の親父が役場に居る頃、県の植松先生に一</p>	

	<p>宮神社の古面を見たいというから、氏子総代許可を取って見せた。そしたらその年に限って、台風が来て山崩れや災害が出た。そしたら西原の若い衆が役場に押しかけて「罰当たりにも古面を見せたからだ」と言って大騒ぎになった。親父が平謝りに謝って牛倉神社の宮司を頼んでお清めをして、幾らか村に寄進して事なきを得た。</p> <p>※ その後よせば良いのに鉄筋で一坪程度の収納庫を造って入れたんです。そしたら湿気で木の部分が全部腐っちゃった。収納庫は湿度・温度を管理しないとダメなんです。西原にはそういうノウハウが無いんです。これが残っていれば書いてある文字の墨をカーボン測定すれば、年代が本物かどうか分かる。今はそこから出して元の本殿に仕舞っています。助かったのは金属製品だけです。木でも桜か何かの材料の版木は残っている。普通の材木はだめです。</p> <p>※ この三枚の棟札は源氏三代の棟札なんです。1代目は源氏の経基、天皇家から分かれた初代。それから2枚目が源頼光で弟の方で「さだもと」というのが兄貴にいなかったかと思うんですが、3枚目は新羅三郎義光この三枚ですよ。だから私は西原で忍んだと。だから西原を出るときに動けない年寄りを西原に置いていったと思うんですよ。万が一甲斐でやられそうになったのなら、またそこに来て隠れようってのは人間の常ですから。せっかく何年か忍んだ場所で住心地の良い場所を全部引き払ったと思う。その子孫が武田なんとかと私はにらんでいます。</p> <p>※ それ以後ずっとですね、上野原はですね江戸時代まで延々とあるんですよ。その資料は昔大月の市民会館で北都留の神社庁の総会の時に少ししゃべれということで、西原の一宮神社の事を話したんです。この時にこの話をしたんです。県から何人か来ていから聞いていたと思うんです。</p>	
--	--	--

	講演	感想
7	<p>【武田騒動】 歴史的に有名な甲府の武田騒動。信虎が幼少時代、武田信直の時代に家督相続で叔父と争った。この叔父二人はですね、実は小山田氏の血筋なんです。肉親の叔父ですから小山田氏は此</p>	<p>今年平山有氏の講演会で武田・小山田の武田騒動（十七年戦争）で郡内の道を封鎖したので小山田家が負けたと言われ</p>

<p>方につくわけですよ、ところが運悪く負けちゃって、早くに叔父二人は負けてしまうわけです。小山田氏の方は今川氏や北条氏の応援を受け、けっこう強くて信直を追い詰めていく。永正五年（1508年）12月に 棒ヶ峰 坊峰の最後の合戦で小山田氏が勝利しちゃう。ところが夜中に反撃をくって討死した。</p> <p>それで郡内へ国中勢が攻めてくる。言い換えれば谷村の町へ国中勢が、どのくらいの数で攻めて来たか分からないですが、人によっては1万というんですけど、攻めて来たんです。この時には勝山城に籠って対抗した。</p>	<p>たが国中以外にも道はあるので、国中との道封鎖で負けるとは思えない。</p>
--	--

	講演	感想
8	<p>【武田騒動裏話】</p> <p>※ この時に面白い現象は、おそらくですけど、私は津久井の人間なんで分かるんですけど、津久井衆と称する北条勢が山越しにこっちへ来て役場の南側の山の頂上で夜な夜な騒いだと思うんです。頭の上で騒いで国中勢は気持ちが悪いわけです、どのくらいの数が来ているか分からない。本当言って、たとえば青野原や藤野町から出陣して来たとなれば100単位だろうと、それでも頭の上で騒がれると良い気持ちはしない。その時に武田勢の中に侍大将をしていたのが上野原から出ている加藤氏です。だから誘導して、氏の兵站がうちの方の八ツ沢と云うところにあっただんです。氏の兵站の束ねをしていたのが西原の武田氏でした。これを道案内して攻め落とすこれはわけない話です。地元の加藤さんが道案内しているわけですから。ひとたまりも無い。この時に一の宮神社の武田は「したや？」の相模川から「やすはた？」から逃げたと見せかけて、逆に四保津の「とちやま？」というところが在るんです。要するに桂川の南側です。あの山の中にもぐりこんで分からないようにした。船はみんな下に下ったから、皆南に逃げたと国中勢は思ったんですけど、どうも南の「とちやま？」から「かわい？」ところに行き、それから桂川渡って、うちの方の貯水池があるところ東電のダムがある。ダムの南側に「山・・・？」あるその山の裏に隠れて、うちの方の「なめざわ？」という部落に下って</p>	<p>* 地名は知らないので間違っているかもしれない。聞き取れていないところもあります。</p>

	<p>く。ですからうちの方の「なめざわ？」には一の宮武田菱でしっかり一の宮でひと部落まとまっている。逆に西原の地元の方では「一の宮」とは言わないで「一宮」という。おそらく、本家筋の「一の宮」に敬意を示して自分たちは「の」を取って「一宮」。うちの方の「なめざわ？」の方は「一の宮」、歴史は面白いです。まるで嘘を言っているようです。</p> <p>※ この「一の宮」の当主である「ぬいのすけ？」は私の実家の檀家でよく知っている。江戸時代初期に大名主になっています。「下・・・村」の名主で家号が「おめえおめえ」です。繋がりが残っています。あと西原に残っていた「・・・神？」というのが残っていた。これが「つるこう神？」とって名乗ってかなわないまでも親の敵とって国中勢に戦いをちょこちょこっと挑んでいるんです。うちのほうに「いど」という土地があるんです。「佐野川」という神奈川に接したところで、その「にいやっ原」という原っぱがあり、ここで国中勢と小競り合いがあった話が残っている。この時に亡くなった人の墓石が「はなざわ」に二基残っています。この時も津久井衆は佐野川に出張って騒いだ感じがある。だから国中勢は・・・できなかった。それで国中へ引揚げた。</p>	
--	---	--

	講演	感想
9	<p>【武田騒動後】</p> <p>あとはご存知の通り、信虎の妹を小山田へ嫁がせて、そして手を繋いだ。</p> <p>* このころは、小山田氏はまだ武田と張り合っていますから、武田の言うなりになっていない。ですから郡内と国中の道を閉ざしたりした地史もあるようです。初代の信有は「のぶただ信昌？」と競う気骨がありましたが、二代目の信有は武田の方の血筋になったので、結局、武田の言うなりになってしまいました。</p> <p>* 親父の初代信有は信虎とやり合っていて、義父の親戚人と繋がって今川氏に通じて、できれば郡内全域を小山田領にしたいという思いをしている。京の将軍にお墨付きを貰うようにしたようですが、この頃の将軍には力が無かったので夢は叶わなかった。けっこう今川氏との繋がりが強かった。</p>	

	<p>【未説明】 十六代小山田信有（出羽守）は武田軍に加わり、天文十六年（1547年）、武田晴信（信玄）が信州佐久郡に軍を進め、志賀城攻めに加わった。この時の恩賞に城主の奥方をもらい、駒橋の館に囲っておいたと伝えられる。</p> <p>当時、小山田氏は谷村に館を移し、その備えとして境（都留市）駒橋（大月市）に館を配備したと思われる。</p> <p>出羽守信有は六年後の天文廿一年（1552年）正月に死去する。この葬儀の参列者が一万人と、郡内一番といわれた。</p> <p>十七代小山田信茂は十三歳で家を継ぎ、武田信玄と勝頼に仕えた。信茂は武田軍で活躍したが、領地を広げたことも無く、報われることはなかった。</p>	
--	--	--

10分休憩

	講演	感想
10	<p>訂正：初代の信有が越中守、二代目が出羽守</p> <p>【岩殿山城に関する古文書】</p> <p>山梨の考古学研究会というのがある。そこの会長さんをされていた萩原三雄先生に以前上野原歴史研究会で講演をお願いした。その時にこの古文書資料を提供して頂いた。</p> <p>※ それまで古文書の話は聞いていたんですが、実際にどういう古文書か分からなかった。その資料の中に小さく入っていたのを拡大して皆さんに渡しています。この資料は古文書としては第二段階なんです。原文はミミズがのたくったような字で、私は読めない。以前上野原町誌を編纂したときに、上野原古文書を担当した米山さんが近所にいたので頼んで、読み下し文書にして頂いた。そうすると何とか読める。</p> <p>※ 題目が「定」という字、これはよく使われます。江戸時代は領収書にも「定」という字を使います。ここでの「定」は命令調。これは上から家臣団に命令というそのための「定」です。よく殿様が家臣に、俗にいう感状を出す場合、感状の正式なものは祐筆が題目を書いたが、戦場で殿様がメモ書きで与える場合は「定」を使います。うちの方の「とちやま？」というところの「小俣きよすけ」という武将が貰ったものに「定」と書かれたものがある。これはメモ書きです、あとで正式なものを出すから、とりあえずご</p>	<p>武田・小山田の武田騒動（十七年戦争）後の和睦条件は婚姻だけでなく、武田方の数騎が岩殿山に入っている。天正九年は増強といえる。</p> <p>それとは別に北条氏が何度か岩殿付近まで攻めて来ているが、その時はどの経路できたのか？</p>

褒美のメモをやる時「定」を使いました。

以下古文書「読み下し」

定
落合の 大師の 小笠原の
新左衛門 縫殿右衛門 助右衛門
小笠原の 百々の 今宿の
源次郎 四郎右衛門 新五左衛門
寺邊 徳行 曾根の 黒駒の
孫右衛門 助右衛門 新七郎 新左衛門
右拾人岩殿令ニ在城ニ、御番御普請等無ニ疎略ニ相勤之由候条、
郷次之御普請役被レ成ニ御赦免ニ候間、自分之用所可被ニ申付ニ之由、
所レ被仰出ニ也、仍如レ件、
天正九年辛巳 土屋右衛門尉
三月廿日○奉之
(龍朱印)
萩原豊前

※ 読み下しを読みますと、「落合の新左衛門」「大師の縫殿右衛門」「小笠原の助右衛門」「小笠原の源治郎」これはおそらく兄弟だと思います。「百々の四郎右衛門」「今宿の新五左衛門」「寺邊の孫右衛門」「徳行の助右衛門」徳行は今でも甲府の地名で聞いた事がある。「曾根の新七郎」「黒駒の新左衛門」「右 10 人岩殿在城を（令）せしむ？

御番御普請等疎略無きよう相勤め之由候条」こんなふう^{これよし}に書いてある。「郷次^{ごうじ}の御普請役御赦免なかれ候間、自分之用所申付けられべきこの由もうせなれるところなり、よって件^{くだん}のごとし」これは絵と同じに、これで「よって件^{くだん}のごとし」と読む。「天正九年辛巳 三月廿日 之を奉る 土屋右衛門尉（龍朱印）萩原豊前」

※ 「読み下し文」は助かると言ったが、古文書でいうと原文を見たいです。原文を見れば誰から誰に出しているかはっきりする。この古文書を発給したのが誰なのか、土屋右衛門尉か萩原豊前なのか、これじゃ分からない。

- ・ ただ、土屋右衛門尉は上に書いてある。それから萩原豊前がちょっと下に書いてある。これから分かるのは、これは土屋右衛門尉に出している文書と解釈できます。
- ・ もう一つは、私が萩原先生から土屋家文書と聞いたことがある。これで間違いなく萩原豊前が出したものだということです。この「定」の中で一番大きな字は萩原豊前です。上の者が下の者に命令を出す。

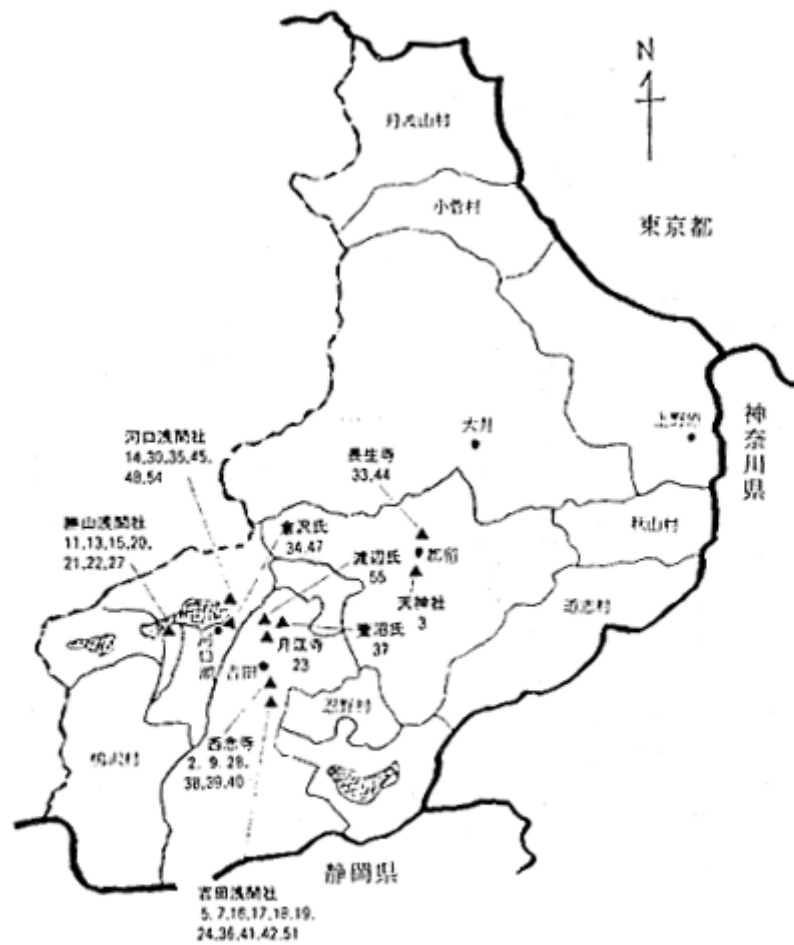
※ 横道にそれますが江戸時代に兵助と武七の郡内騒動というのがあるんです。兵助は犬目という私の村から出ています。この時に兵助が犬目の村役人に出した古文書がある。この古文書が笑っちゃうんです。犬目役人衆という宛名が上の方に書いてあるけれども、字が小さい。自分の兵助は大きな字で書いてある。この意味は当時犬目宿では、犬目の宿役人よりも俺の方が勢力が有りますよ。犬目の宿役人なんか屁の河童だということ^{ばくとり}を暗に許している。自分がこれから出かけるからあとは頼むという古文書を書いています。だから兵助というのは当時犬目で博取^{ばくとり}？をしてかなり力があつた。自分のミズタヤという家は人に貸して、自分はシンデンシュクに賭場を開いて、要するに親分です。それで文書を見ていくと、まさか博打の金とは書けないので、何と書いたかという無尽の金だと書いてあるんです。面白いですね。山梨の無尽は歴史もあるんですね。

※ 古文書は本当に面白い。原文で見ないと本当に古文書の価値は分からない。読み下し文は読むには有難いが、原文が欲しい。そうすれば萩原豊前がどのくらい力があつた武将か。言い換えればこの人が勝頼に代わって武田軍団の命令を出しているわけですから、

<p>これは力があると思います。</p> <p>※ このことで何を言いたいかという、この文書は天正九年です。天正九年に国中から岩殿山の守備隊が来ている。ここで皆さんに理解して頂きたいのは、戦国時代に十騎というのは十人で来たわけでは無い。この一騎は家の郎党を連れて来ていますから、槍を持たした軍団が一人について十二・三人は付いて来ます。ですから十騎来るということは百二・三十人の軍団です。十人で馬に乗ってパカパカ来るのでは無い。岩殿山を守るために百五・六十人、岩殿山で生活するから下女も連れて行きます。時には体験学習のため子どもも連れてくる事がある。ですから、かなりの軍団が岩殿山に入っています。十騎ということとは百五十人ぐらいの軍団だということを理解して欲しい。それで岩殿山に入っている。</p> <p>※ ですから岩殿山にはかなりの兵糧だとか水、燃料こういうものが蓄えられていたと思われる。裏の方の今で言う賑岡とか七保から常に補給していたと思います。なぜなら、この地域に土屋姓が残っています。ということは此処に来る軍団の中から置いておいた血筋がある。</p> <p>こういう事が分かってきた事は、やはり、この土地（岩殿山）は小山田さんの出城ではまったく無かった。</p> <p>※ 逆に小山田さんの勝山城を見張る。監視です。万が一大事が起こればいち早く狼煙なりハトなりの手段を使って「小山田裏切ったぞ」と連絡する。常に岩殿の上から監視です。</p> <p>※ 此処（古文書）では普請とか、何か岩殿の上で家でも造っていたのかいうけれど、そうじゃなく、要するに常に油断なく見張っているという状態だったということ。この事を理解してほしくて今日話をした。</p> <p>※ こういうふうに古文書から史実を考察していくって事です。</p>	<p>* 一部削除</p>
---	---------------

	講演	感想
11	<p>【織田家支配】</p> <p>※ この後（織田家支配時）甲斐は、川尻秀隆というとんでもない武将が甲斐を支配する。これが信長の虎の威を借りる狐で、まったく典型的でやりたい放題。甲斐の人間をやたらと首を切ったり、ですから岩殿に籠った人たちが国中に逃げ帰るわけです。逃げ帰って川尻に見つかりと大変ですから、非常に苦心しながら岩殿を抜け出したでしょうね。</p> <p>※ ですから稚児落との恐ろしい伝説があるけれど、私はまんざら嘘じゃないかもしれない。下女がきているから子供も生まれることがあるわけです。大将（小山田公）が甲府で殺されたにしろ、小山田軍団は残っていますから、これに見つかったらやられますから、だから密かに岩殿山からを抜け出していく。その時子供に泣かれたらたまったもんじゃない。谷底に放るしかないでしょう。私もこれは嘘話では無い気がします。</p> <p>※ 特に6月1日信長の本能寺があるでしょう。この後安心して国中に帰って行ったんじゃないかと思う。国人たちがすぐに6月の15日には川尻を捕まえて惨殺です。人間勝って兎じゃないけども、けっして威張っちゃいけない。</p>	<p>ネットでは甲斐国で略奪・放火の限りを尽くすなどの圧政を行ったとされるが（『甲斐遺文録』『甲斐国歴代譜』）、これらは近世の地誌類などに記録されているだけで同時代史料では全く確認できないものである¹。秀隆の圧政なるものは、信長・信忠父子が武田氏縁の寺社に極めて厳しい措置を取ったことや過酷な武田遺臣狩りを行ったことが秀隆一人の責任と誤解されたことが原因ではないかとされる</p>
12	<p>【上野原市の話】</p> <p>※ 私が小生意気に会長（上野原歴史研究会）の会長をやっていますが、この会（顕彰会）が羨ましい。私の会の事務局が病気で動けない、どうしようかな、解散寸前です。顕彰会は素晴らしい事務局がいる。武田さんはすごい。11時には私のところに電話を頂きまして、この気遣いは素晴らしい。こういう役が付いていればこの会はどんどん良くなると思います。歴史は研究すればするほど分からないことが多い。一つ分かれば十ぐらい分からない事が出てくる。</p>	<p>* 一部削除</p>

	講演	感想
13	<p>【小山田家の支配】</p> <p>あとは小山田さんの領地に関する発給の資料が、先ほどの萩原先生の資料の中にあったから付けとききました。やはりこの資料を見ても、小山田さんの領地は郡内全域では無かったという事がはっきりします。吉田を含めて昔の南都留郡といった地が領地だったんです。</p> <p>※ もちろんこの中には、地域の豪族が各地にいます。たとえば吉田の小林一族、結構名のある一族です。他にも地域地域に土地をバックにした国人みたいなのがいます。いざ出陣となると、小山田軍に従って家の郎党を引きつれて小山田軍団に入る。こういう組織は徹底していました。</p> <p>※ 上野原の方も加藤氏の領地だったけど、歴史的に調べると面白く、一時は西原が北条氏の領地になっています。戦国時代の末期です。だから西原のお寺にいくと、お寺の屋根に「三つ鱗」がドスンと乗っかっています。桐原の一面「オオダイト？」ここが北条氏の領地になっている。面白いですね。加藤氏もうかうか出来ない。そういうふうに裏の方から北条氏の力が及んでいます。</p> <p>※ そこに住んでいる人は一属ですから決して戦いはしません。とくに津久井の人達と郡内の人達との血縁は非常にあるんです。要するに国中と郡内の血縁は切ったから自然に東の方にいって繋がりがあがる。</p>	



(注) 番号は旧稿第10表の文書番号

郡内領内における小山田氏発給文書分布図（柴辻「小山田氏の郡内領支配『郡内研究』第2号1988より）

<p>※ 江戸時代に飢饉で大勢死んだというけれど、私は信じられない。なぜならば郡内にはジャガイモとサツマイモがあったんですよ。ジャガイモの技術を津久井に伝え、津久井のサツマイモの技術をこっちで貰った。津久井の「うちごう」というところにサツマイモの研究所があったんです。江戸時代にサツマイモの苗床を作る技術が見つけた。それを我々が教わった。サツマイモとジャガイモがあればおいそれと飢え死にしません。よく飢饉飢饉といって道路にぞろぞろ死んだ人が転がっていたというけれど、いまだに私信じられません。ですから江戸時代天保の飢饉、天明の飢饉というけれどさほど死んでいない気がします。</p>	<p>天明飢饉 1782～1788 年 天保飢饉 1835～1837 年 ジャガイモ 1600 年代にオランダより入ったとの説。当初は花の観賞目的。1700 年代に食用としたようです。1770 年代～1780 年代に山梨県中井という代官が幕府の許可を得て九州より取り寄せて栽培を推奨した。サツマイモ「蕃薯考」1735 年で栽培を奨励し普及。</p>
<p>※ 津久井と郡内は同じ一族です。私が神奈川で教員していたとき言葉で一回も困った事がないですから、まるっきり我々の言葉は相模弁です。けっして甲州弁では無い。ただね北条氏が動くときはしかたが無いから津久井衆もこっちに来るけども、腹のなかからここで戦いたいとは誰も思わない。だから先ほど言ったように国中勢が郡内に来れば、津久井衆は国境を越えて出てきて、山の上で騒ぐ。</p>	
<p>※ 郡内は時代がさかのぼれば相模であったと、これは山梨大学の磯谷先生が言っていました、郡内は相模だと。それが甲斐になった事で小国として認められたんだろうと。だから国中の者は有難いと思わなくてははいけないんです。</p>	
<p>※ 先ほどの兵助の一揆も、(国中) 自分たちで一揆を起こしておいて、その責任を兵助と武七に押しつけて、自分たちが打ち壊しをやっておいて、郡内から来て打ち壊したといった。とんでもない事です。郡内から行ったのは直ぐに、兵助と武七と初狩の人は皆帰した。最後まで居たのは兵助だけです。武七は途中で寝込んでいた。</p>	<p>* 一部削除</p>
<p>※ こんなのは武田を滅ぼしたのと同じ。穴山梅雪なんか一番悪い。ささっと徳川に寝返って、勝頼を追い込んだ。ですから最後に来ないでくれと頼んだ小山田さんは郡内を救った英雄です。あのときに1万を超える織田勢が来たらどうなっていたか、川尻が証明している、やりたい放題です。 以上、信茂公について話をさせて頂いた。</p>	

	講演	感想
14	<p>【小山田家まとめ未説明】資料3頁</p> <p>信茂の北条領地は他国衆の筆頭で四百六貫八百十二文となっており、津久井城主の内藤左近将監<small>しょうげん</small>が千二百二貫八百文で、副将の内藤兵部少輔<small>しょうゆう</small>が百貫五百文であり、その中間に位置する。ちなみに家来では井上加賀守が六十五貫十文で、守屋若狭守が三十貫五十文であった。</p> <p>このことから、北条領地にかなりの所領を有したことがわかる。信茂が子孫を守るため、この北条領にそれなりの子孫がかくまわっていたことは十分考えられることである。</p> <p>天正十年（1582年）三月三日、武田勝頼は最後の拠所とした新府城を火で焼き、郡内の岩殿城に向かって出陣した。最初数千騎いた軍団は東に向かうにつれて離反する者が増え、大和村に着いた時は数十騎と激減して、討手の織田の大軍と合戦できる状態ではなかった。</p>	<p>武将の本隊は荷駄隊と御坂峠の本道を通って岩殿山に結集している。</p>

6. 質疑

	質問	講師回答	感想
①	<p>武田家が滅ぶ時、小山田家と加藤氏の関係について先生はどう考えていますか</p>	<p>いろいろな説がありまして、加藤氏はこの時両養子だったんです。一人は勝沼五郎の次男坊、嫁さんは阿倍の何とかいう人の娘です。ということで、地元の加藤一族と血縁が無かった。おそらくバックボーンの勝頼が亡くなった時に上野原に居るのが不安だったようで、上野原にお城が在ったと私は言っているんですが、城に火を付けて勝頼を助けに行くことを口実に上野原から出て、それから五日市の方に行くようです。一族の流れも桐原にもあるようです。それから小菅の一画にも加藤の一族が居ます。そういうような手づるを頼りながら東京都の方に逃げ出したようです。最後は</p>	

		<p>五日市あたりに潜む予定だったのではないかと思う。五日市には武田の落ち武者がかなり潜んでいる説があるので、それを頼りに出かけて行って瑞穂町のところでやられてしまった。落ち武者狩りに会ってしまった。</p> <p>この間に、上野原に小山田の血縁が攻めて来て上野原城を焼いたという話もある。私は信じていない。そういう事を言う上野原の郷土史家もいます。ただ、この時に入ってきたのはどうしても北条氏ではないかと思えます。ですから谷村にしても上野原にしても入って来たのは北条勢だと、中には上野原に北条勢を手引きしたというのが居るんです。</p> <p>ところが瑞穂町で亡くなる時に、幼児 3 人はなんとか身内の者が助けている。一番年上は上野原に来ています。二番目が武蔵野の目黒に行っています。三番目が神奈川の秦野に行っています。こうして三人を残しています。上野原に潜んだのが上野原の本陣になります。明治まで延々と繋がっています。</p> <p>ただ、明治に入って倒産して本陣を売ってしまい。</p> <p>あと小山田さんの一族については不勉強で申し訳ないけど、分かりません。ただ、原町田にかなりの領地なんです。ようするに何百貫という領地ですから、おそらくそこにも子孫を残していたと思うんです。調べれば江戸時代の旗本衆になって一族は残っている気がする。研究してみてください。</p>	<p>*一部削除</p> <p>*一部削除</p>
--	--	---	---------------------------

	質問	講師回答	感想
②	上野原は国境で、北条であったり、古くは国中武田氏が入って来たりいろんな影響があって複雑な要素で分	大月市初狩の辺は武田の力が入っていて、人によっては武田氏の勢力圏は鳥沢あたりまで入っていた説がある。鳥沢のお寺の門に武田菱を使っているんです。袴入りという「史れい？」があり、信玄があそこで袴を付けたから袴入りだ。そのような事を考えると武田氏の影響は強かった。	

	<p>かり難い。上野原と小山田氏の関係を教えて欲しい、上野原は津久井から入って来ているというのは北条の支援を受けていると考えてよいか。小山田氏は北都留は関係無く南都留限定で大月は小山田氏の影響は無いのか</p>	<p>上野原の場合ですね北条氏の影響ではなく。逆に北条領の津久井の方で領地を取っています。上野原の加藤氏の領地になったのが、我々はあまり知りませんが、津久井の「敵知行干渉？」という言葉がある。どういう意味かという加藤氏の領土のなったという村が、たとえば、佐野川、沢井、吉野、藤野、名倉、日連これらの村は「敵知行干渉？」ですから領地の半分は加藤氏の年貢に入った。</p> <p>ですから加藤氏は鶴川の拠点は役に立たなくなり、どうしても上野原の台地町に城を造る必要性があった。堀を深くしてあそこに城を造った。藤野から見える位置に造った。</p> <p>加藤氏はなぜか両養子で、それは武田家と親戚になりたいこの一心で両養子を取ったんじゃないか。ところがそれが逆になったんです。信玄が勝沼五郎の子供を東国と内通したことで殺してしまった。娘が信玄のお妾さんになっていたんですけど、尼さんになって大善寺に入ったとおもいます。かわいそうです。この人勝頼の育ての親です。せっかく両養子を取ったのに役に立たないどころかマイナスになっちゃった。歴史は調べれば調べるほど面白い。</p>	
--	---	--	--

	質問	講師回答	感想
③	<p>話に出てくるのは20号線沿いの話が多いんですけど七保・小菅の方はどうなんですか。武田家の影響はどうなんですか</p>	<p>そのコースで一つ言いたいのは「松姫逃亡コース」。この間大月市のこの会の方で松姫ゆかりの寺の檀家総代かなんかが書いた本を参考に旧甲州街道の前身を通ったとあれはほら吹きのはらっぺで、あれは全くの間違いどこを実際に通ったかという山の上なんです。向嶽寺から大菩薩の山の上の峠を通過して来ている。それで西原に抜けている。西原から東京都に渡っている。これは間違いない。これね幼児を3人連れているのでさっきの稚児落としてはいいけど、とても普通の街道筋を通れるものではない。幼児は泣きますから、これは山の上のコースしかない。</p>	<p>顕彰会相談役の研究では、松姫様一行は少なくとも100人と言われている。3月7日に甲府に徳川・織田軍が入っている。当然本隊に先立って先遣隊が付近も警戒しているはずである。そこを10日に田野で勝頼が亡くなるという事は</p>

		<p>本を書いた男が自分でも言っています。私は歴史なんかド素人だと、だから私の言うことが史実と異なるかも知れませんが断り書きしていますから。あの本をよく読めばあの地図は全くのでたらめ、あのコースで松姫が来たら、小山田さんは首が助かっていたかもしれない。意味がわかります？ これを捕まえて信長に献上していればもしかしたら小山田さんは助かった。意味がわかります？ あれはだって松姫は信長の倅の嫁ですもん。こんな献上品はない。だからもしあのコースだったら小山田さんは捕まえて甲府へ持ってきます。ですからあのコースだけはカットしてください。私これは断言します。</p>	<p>その甲府側では戦いが起きている。そこを松姫様達がバラバラに逃げたとしても柳沢峠に行くために甲府側に戻って逃げるとはとても思えない。</p> <p>それであれば、大菩薩の方がまだましである。</p> <p>そもそも岩殿に集結した武田の武将は荷駄が通れる御坂峠を通過して集結している。笹子峠は間道なので勝頼にお供している武将達が少ない。</p> <p>それに岩殿の武将と小山田氏が敵対している状況はない。それが、松姫様が連れてくる幼児三人に現れている。勝頼公の姫貞姫、信茂公の姫香具姫、仁科盛信の姫の三人です。</p>
<p>大菩薩って私中学校の時に、キャンプで登ったんですけど、あそこ 2000m 近くありますよね。旧暦三月四月ぐらいで、五月に北八の千何百mのところまで雪が多かったです。完全に雪です。そこをそういう人達が…。</p>		<p>だから、嶺の方じゃ無いです。今丹波と塩山を繋いでいる柳沢峠です。ただ松姫はあっちには行っていません。あの手前を尾根伝いに西原の方に回って、だから西原に下りた時には足が腫れて、西原のお寺で治療を受けています。その治療のお返しに、このお寺に何て言うのか白木棒みたいなものを見せている。武田の裏紋の花菱です。これがこのお寺に残っています、ですからお礼に置いていった。</p> <p>平松先生がよく研究されていて、まとめています。結構よい資料で東京都まで調べに行つてまとめています。平松先生に聞けば一番良い。</p> <p>柳沢峠を言っているんです。おそらく武田が甲斐に入ってきたのもあっち（柳沢峠）で嶺の方ではない。</p> <p>ただ、大菩薩の嶺の方に金の仏像をあげたというんです。これが大菩薩峠の地名のゆかりなんです。それで大菩薩と名前が付いている。無垢の金で出来ているというので小っちゃなものだとは思いますが、これを山の頂上にあげたという説がある。逃げたのは山の方ではなく柳沢峠です。</p>	

	質問	講師回答	感想
③	上野原と桧原村で、檜原の	非常に関係している。郷土刀として文化財に指定しているのが、あのコ	

	<p>城主の平山氏と加藤氏との関係はどうか</p>	<p>ースで、要するに八王子の下腹刀と言ったか、あの刀の鍛冶があのコースから上野原の一面に来て刀を打ったという事実があって、上野原の加藤氏が郡内で下腹刀を使ったという説があるんです。何本か上野原にあります。後世になってから長太刀というのが江戸時代になってからか下腹刀の名残で打っていますけど、戦国期はあのコースで来て打っている。ですから繋がり是非常に有ります。</p> <p>武蔵の方に出るコースとして、今の甲州街道のコースでなくて、あのコースも多く使ってます。</p>	
--	---------------------------	---	--

	<p>小俣会長の感想</p>	
<p>④</p>	<p>先ほどの松姫様の東下のコースですけれど信松院様では西原峠を通過していない説です。大月の中を通った説を取っているんですけど、私はそっちの説を取っています。何故か一番通りやすい。松姫様の首を持っていけば、先生は、織田軍は喜ぶだろうというお話でしたけれども、私は逆だろうと思う。確かにその時点では松姫様と織田信忠さんは一応破談されたという状況かもしれませんが、一応破談されたにしても今現在まだ松姫様は貞淑な格好で信忠さんを慕っていたんだと、信松院のお寺さんも信玄公の信、松姫様の松、或いは信忠公の信という形で信松院という名前が付けられたというお話を伺った。大月のこの辺りを通った、西原を通過していない、大菩薩を通過していないという信松院様流の松姫様の東下コースであると捉え方をしていると伺った事があるんですけど、その辺はこれから研究していかないとけない事ですが、私はそんなことを思いつつ伺っていました。</p> <p>いろいろお話を伺いましてありがとうございます。私は質問というよりも、伺った話のなかでこういう話があるんだなど、そういう理解をさせて頂いた。</p>	

7, 御礼 平井様

8, 閉会のことば 島崎

以上